

特集 地軸 2011年08月02日(火)

弔いのかたち

猛烈な光と暑さなのに、どことなく寂しく陰りを帯びている。8月に入ればもう、秋は隣。今年はとりわけ、鎮魂の思い強い静寂の夏▲

「東日本大震災直後の1週間、うちのスタッフ80人の記憶は飛んでるんです」。先月末の日本緩和医療学会で、宮城県名取市の医師岡部健さんの講演を聴いた。千の遺体を検案し、死亡診断書を書き続けた地域の医師、家族を置いて患者の元へ走った看護師…。声は時折、震えた▲岡部さんは、患者を自宅でみとる在宅ホスピスケアにいち早く取り組んだ先駆的存在。その岡部さんが職員1人を亡くし「自分が被災者になっちゃって」、心のバランスを失った。救ったのはボランティアの僧侶だった▲

写真に、心のこもった経を上げてもらうことで「手を合わせる場」ができ、ずっと落ち着いたという。宮城では今、僧侶や牧師が超宗派で連携、身元不明者の弔いや被災者の心のケアに当たっている。医療者が精いっぱいつないだ命を、宗教者が引き継ぐ▲

省みれば、葬儀や墓参など宗教儀礼からは遠い日々。しかし、丁寧に手を合わせて祈れば、亡き人への後悔や悲しみはわずかでも和らぐ。生きる者のためにこそ「かたち」は大切、と思い返す▲きょうから本社で始まる震災写真展にも、そっと供えられた花の写真がある。跡形もない場所によりみがえる、誰かの記憶。祈りを、遠くへ。